

久保 勲

<147>

映画「少年時代」の県内ロケハンや少年搜しに走り回りながら、いつも頭の片隅にあったのは、県出身で原作者・漫画家・プロデューサーの藤子不二雄Ⓐさんのことだった。映画の製作と富山でのロケは藤子不二雄Ⓐさんが決行した。僕も「富山を舞台に映画を」の一言のために協力することを決めたのだ。

藤子不二雄Ⓐさんに初めて会ったのは平成二年、「少年時代」の完成披露サイン会だった。同席された篠田正浩・岩下志麻夫妻の元気な姿に比べ、秘書役のお姉さんと連れ添つて現れた藤子不二雄Ⓐさんは「映画をつくった」という華やいだ印象が感じられなかった。

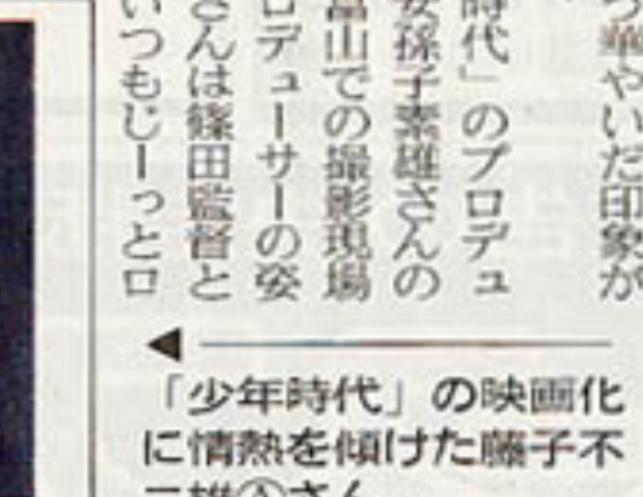
この時は「少年時代」のプロデューサーで、本名の安孫子素雄さんの印象が強かった。富山での撮影現場には必ず安孫子プロデューサーの姿があった。安孫子さんは篠田監督とカメラの後ろで、いつもじーっとロケ現場全体や監督、スタッフの動きを見つめていた。一瞬、総監督のように思ったこともある。篠田監督は映画をつくる職人集団のボスというのが実感だった。

サイン会で受けた印象は、この年の夏、婦中町の「いこいの村富山」で開催する映画観賞団体全国連絡会議の全国映連・映画大学の基調講演を映画プロデューサーとしての藤子不二雄Ⓐさんに依頼していたからかもしれない。

キネマ旬報の三年二月下旬号で、篠田監督は読者賞第一位を受け、次のようにこたえている。「映画『少年時代』は藤子Ⓐ氏の情熱と責任において生まれた作品だけに、それに力を貸した努力が多少とも報われ、責任の一端を果たしたように思われます」

やはりそうだったのだ。『藤子不二雄Ⓐさん』の情熱と責任において生まれた作品』が『少年時代』だったのである。もしかすると藤子不二雄Ⓐ監督の『少年時代』が誕生していなかったかもしれないのだ。

テーマソング『少年時代』の井上陽水さんの歌声を聞くたびに、この映画の成り立ちの不思議さが頭を駆け巡るのである。



「少年時代」の映画化に情熱を傾けた藤子不二雄Ⓐさん

## 安孫子素雄さん